

貴女を花に例えるなら

Binegar*Blue

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

「いっそ、笑えてしまえるくらい不毛な恋を」

私たちは、本当の恋を探している。

目次

エピソード

1

vergisssmeinnicht

9

エピローグ

今にも凍りつきそうな夜空の下、私は事務所の屋上にいた。そこは、私と彼女の秘密の場所。

約束した大樹の下で私は彼女を待つている。こうやって椅子に座り何かを待つ時が私は一番辛かった。オーディションの合否通知も、ライブが始まる前も、何かを待つときはいつも胃がキリキリと音を立てそうな緊張感が身に染み付いて離れようとはしなかった。そんな感覚はいつになっても好きになれなかった。

ましてや、今日私たちはいつもみたい楽しくお話をするわけでもなく、「好き」を言い合うわけでもない。私はこれから私の「大事」を傷つける。

意図的に――

突き放す。

「卯月」

聞こえてきた声は、最後に会った時と同じ透き通ったまっすぐな声だった。

「遅くなってごめん。待たせちゃったかな」

約束の時間はとつくに過ぎていた。

「ううん、そんなに待ってないよ」

当たり前のように嘘を吐く。

私は随分前から待っていた。

なんどもなんども、この屋上で待っていた。

でも、あなたはー

「ねえ、凜ちゃん」

私は問いかける。

「私、今笑えていますか」

彼女は顔を凍らせた。まるで世界が壊れてしまうことを知らされた人みたいに。

「卯月…き、急にどうしたの？」

私の「笑顔」ではない表情は、よっほど彼女を動揺させたらしい。

「もしかして遅れちゃったこと怒ってるの？乃々との撮影が長引いちちゃって…」

ーその単語を聞いた時

ひび割れるような

ひどい痛みが頭の中を駆け巡った

「…そう…ですか…」

私は立ち上がり、足早に距離をとる。

「乃々ちゃん……かあ……」

乃々ちゃんとの撮影、乃々ちゃんとの仕事、乃々ちゃんの衣装選び、乃々ちゃんのお出かけ、乃々ちゃん……。

乃々ちゃんと、ののちゃんと、ノノちゃんと、~~×~~ちちゃんと……

制御できない自分の思考回路が暴走してしまう前に、私は深呼吸をする。

愛憎は表裏一体、まさにそうなる一歩手前。

乃々ちゃんが事務所に来てから想い続ける私の気持ちと比例して、彼女と私の距離はみるみる離れていく。

だから私は確かめたいことが一つだけあった。

「ねえ、凜ちゃん？」

私は、声のトーンを一つ下げた。

「私、凜ちゃんにとつてなんですか？」

「そんなの……決まってるじゃん。」

私にとつて大切な人だよ。それ以外に答えなんてある？」

凜ちゃんは戸惑うことなくはつきりと答えた。

私は足を止めて、薄れゆく希望に縋るような思いでまた確かめた。

「私のこと、まだ——好きですか」

凜ちゃんの足音が一息ずれて止まる。彼女の息を吸う音が聞こえて、息とともに吐露する。

「もちろん、大好きだよ、卯月」

甘い言葉は私の心に溶け込んで、深い溝にはまって消えた。不覚にも笑みがこぼれた。

好きな人に「好き」と改めて言われると、やはり頬が緩んでしまうのを止めることはできなかった。

ああ、私やっぱり凜ちゃんのこと大好きなんだ。

—でも

—こんなに こんなに

あなたが好きなのに

—きつとその思いは全て届かない

「ねえ、どうしたの卯月。なんかいつもと様子が違うよ？もし悩んでるなら、聞かせてよ」

黙りこくつてうつむく私に、しびれを切らしたのか凜ちゃんは駆け寄って、ぎゅつと、私の両手を握った。

ずるいや、凜ちゃん。そうやって寄り添われたら私、またあなたを好きになっちゃう。

うつむいたまま、凜ちゃんの流麗な円弧を描いたような黒いニットタイツを履いた太ももの先を、私より少し小さい足を見つめる。

やっぱり…私に凜ちゃんのこと…。

そう思つて、悩みを打ち明けようと顔を上げようとした瞬間、ふと握り締められた凜ちゃんの腕が目に入った。

手首には見たこともない腕輪がしてあつた。これは…

そういえば乃々ちゃんも同じものを…していた。

私の中にある迷いはだんだんと消え去つていった。

「乃々ちゃんの事…」

「え？」

「それじゃあ、乃々ちゃんの事はどう想つてるんですか？」

愛しさと、憎しみと、妬みで溶け出しそうな思ひは、心の牢獄から逃げ出した。震える声で、唇を噛み締めながら、言葉を連ねる。

「私、今まで凜ちゃんのお仕事すごく楽しかったです。今までにない、一人じゃ見られない景色を凜ちゃんとなら見られました。凜ちゃんは年下なのに、私よりしつかりして…一度立ち直れなくなりそうになつた時も、私の手を取つてくれました…そんな凜ちゃんが私、私……」

握られた手は強く、強く握られて、凜ちゃんの暖かさで、徐々に熱を帯びる。

しかし、私にはその熱はもはや余分なものになってしまっている。

「大好きでした。」

「それなら、ちゃんと目を見て言つてよ、卯月」

こんな顔、絶対に凜ちゃんに見せたくない。

これから起こつてしまう出来事を思うと、今にも泣き出しそうだ。

「でもー」

でも言わなくてはいけない。

そうしなくちゃならない。

だつてそれが、私にできる最善のことだから。

突き放そうとする声色に、凜ちゃんは半歩下がった。

「でも私なんだか、今の凜ちゃんは好きになれないんです。」

「それつて乃々が関係あるの?」

凜ちゃんはやつと気づいたようだった。私はうつむいたままうなずく。

「私、最初は乃々ちゃんとお仕事した時すごく嬉しかったんです。最初の内は気が合わないんじゃないかなーつて、心配していたんですけど、乃々ちゃんと凜ちゃんは事務所であううちに打ち解けあつて、私の心配も杞憂のようで、ほつとしました。」

最初はどうとも思わなかった。

「乃々ちゃんも仲良くしてる凜ちゃんは私と出会った時みたいなのに、頼もしくて、お姉ちゃんみたいで。」

けれどその優しさが妬ましくなった。独占したくなかった。

「私以外にその優しさを向けている時を目にする、なんだか、私の中で『凜ちゃんはもう私なんかには愛想をつかしたんだろう』って

凜ちゃんが乃々ちゃんに取られちゃうんじゃないかって、疑心暗鬼になって、不安になって仕方がなかったんです…」

「そんなこと…」

「大人気ないって私も分かっています！でも私…」

これ以上他人に私の幸せを奪われたくなくて、

でもその幸せは誰かの幸せかもしれない、

私わがままをいえば誰かは不幸になってしまいかもしれない。

そんな思考が堂々巡りで

幾多の矛盾と迷いが混ざり合った心で、正直に笑うことができるのだろうか。

私は、アイドルとして笑顔を作る事ができるのだろうか。

今出せる精一杯の笑顔を、涙を流しながら、凜ちゃんに向け、震える声で、私の気持

ちを伝える。

——今、凜ちゃんの前じゃ
素直に笑えないんです

vergißmeinnicht

ペチュニア、菜の花、撫子、ルピラス、アネモネ、したの並木道を見下ろせば桜が見える。

暖色で彩られた花壇。そして天井には仕切りなんてなく、一面の空模様が見える。

開放感溢れるこの場所は素の自分を解放させられる彼女にとっては数少ない名所の一つだ。

—美城プロダクション

彼女が所属するアイドルプロダクションの事務所にはどの部署にも開放ラウンジやカフェ、マツサージュールームなど身体的、精神的に休める場所はたくさんある。過分と言つてもいいほどに。でも彼女にとっては花に囲まれていて、それでいて自然を感じられる、この屋上広場こそが最適解—だったのだが。

珍しいことに、先客がいたようだ。

広場の中央に位置する噴水を起点として、この広場は螺旋状に道が連なっている。北寄りの木陰にあるベンチで先客であるもう一人の少女はうたた寝をしていた。

春の暖かさに眠気が誘われたのか、何にせよ目の前で寝ている少女の寝顔は、彼女が

いつもすれ違いざまに見かける笑顔とはかけ離れた無防備な無垢な少女のそれだった。

くうくうと小さな寝息を立てながら右に傾いたり、左に傾いたり、振り子のように等速で頭が右往左往している。

「ふふっ」

彼女はつい笑みをこぼした。

起こしてしまわないよう、音を立てずにそつと隣に腰掛けた。

よく見ると一輪の花弁が眠り姫の頭に咲いていた。白く形の整った花弁。ベンチの横に植えられている袖の花が風で飛ばされたのか、それとも誰かが悪戯で置いていったのか、寝息を立てる少女の髪に引っかかっていた。

本来柚子の花は開花時期が五月なのだが…、怪訝そうに顔をしかめる彼女だったが、（気になることは気になるけれど、まあ別に可愛いからいいか）

と自分もリラックスするため深く息を整えて、しばらくの間目を閉じた。

そよ風が、二人の髪を軽く靡かせた。髪は交差しつつも、絡まったり、ほつれたりを繰り返して、空中をふわふわ、と舞っている。

すると、彼女の鼻腔に柚子の香りが漂ってきていた。寝ている少女は、頭を彼女に預けながら臆げに目を覚ます。

「あ…あれ…？プロデューサーさん…？」

目を覚ました少女は、体勢を立て直しつつ、涙目で横に座る彼女を凝視した。

「…やっと起きたんだ」

目をこすり、ぼやけた焦点を合わせていくと横に座る彼女が「プロデューサーさん」ではないことを気づく。

少女は恥ずかしさから蒸気が立ち昇りそうなくらい赤面した。

「あ、あれ？すみません！その！私っ！お昼ご飯食べてたら急に眠くなっちゃって！その！失礼しました！」

気が動転しているように見える少女だったが、素っ気ない態度は決して取らずに、はにかんで誤魔化した。

もし横に座る彼女であつたら、ぶつきらぼうに

「あ、そう」

と、言葉を残して立ち去っていることだろう。

「汚れなき人」

目を覚ました少女の頭を見つめながら、彼女は不意に言葉を漏らした。

「？」「あ……」

ふと口にした言葉に彼女自身も驚いているようだった。戸惑いを隠せず、目を泳がせ

ているが、すぐにその鉄面皮は戻ってきた。

「……その頭に乗つかつてる柚の花言葉だよ」

「えっ？頭……？」

少女はあたふたして髪をかけ分けて探している。それでも見つけないことができず、それを助けるため、彼女は後頭部に手を伸ばして花を掴みとって、改めて、それを少女の前髪に綺麗に結んだ。

「花に囲まれながら寝て、プロデューサーさんのこと呼んじゃうなんて、よっほど居心地良かったんだ。」

二度目の赤面。

少女は、その恥ずかしさをごまかそうとして、とつさに質問を返す。

「私……よくここでお弁当食べるんです！」

「お花もたくさんあって、天気が良い日には他のアイドルもくるんです！夕美ちゃんとか、蘭子ちゃんとか！」

（きつと友達作りが上手なのだろう）

彼女の中で少女の印象はいつも明るいなものだ。

少女は孤独とは無縁そうな眩しい笑顔で、次々と誰かの名前を羅列する。

そのうちのいくつかに見知った名前もあつたけれど、反応する必要も感じなかつた彼女はそのまま受け身の姿勢を保つ。

「ええと…、あなたは…このアイドル…ですよね？」

話を聞いていく内に、次はあなたの話も聞きたいな…と言わんばかりの構つて欲しいような顔つきで視界の外から彼女に顔を傾けてきた。

「ま、まあ…、そんな感じかな」

彼女は自分の話をするが苦手だつた。

自分がまだ夢中になれる何か。

「渋谷凜」という名前だけが彼女の持つ価値だつたから。「熱中する何か」がないから、格別語ることも特にないし、ましてや憧れの人とはいえ、初対面の少女に自分の醜態を晒してまで教える義理もなかつた。

(これ以上探られても、この後に控えている仕事に差し支える)

彼女はそれを理由にこの場を去ることにした。

「それじゃあ、私この後まだ用事あるから」

話し足りない少女は何か言葉を発そうと口を鯉みたいにパクパクさせる。

しかし彼女は待つことなく、立ち上がり脚を払うと広場の出入り口へと向かつた。

「あ、あのー！」

彼女とはまた違った優しさの含んだ声が広場中に響き渡った。

「また……ここで会えるでしょうか？」

彼女は背を向けながら、彼女に見えない笑みをこぼしながら、右手を振って返事をした。

出入り口で待つ、私にしか聞こえない声で。

——うん

また会えるといいね

卯月